

地域社会学会 50 周年記念事業「地域社会学を振り返る」(3)

岩崎信彦 (神戸大学名誉教授)「曖昧語『地域 region』と

『コミュニティ community』はどのように深化したので

あろうか ―地域社会学会 50 年と私」をふまえて

浅野慎一(摂南大学)

2023 年 12 月 9 日、立命館大学衣笠キャンパスにて、地域社会学会研究例会が開催され、地域社会学会 50 周年記念事業「地域社会学を振り返る」(3) の一環として岩崎信彦元会長(神戸大学名誉教授)が報告された。

岩崎氏の御報告は、これまでの地域社会学会の歩みの中で議論されてきた多くの論点を明快に整理し、そこに御自身の創見を交えた、示唆に富むものであった。当日、玉野和志会員から「地域社会学の歴史のすべてが詰め込まれている」との発言があったが、まさにそれにふさわしい濃密な報告であった。

筆者は、僭越ながらコメンテーターを務めさせていただいた。

以下、当日の質疑討論について、簡単な覚書を記したい。なお正式の記録は、近刊の『地域社会学会ジャーナル』に掲載される。本稿はあくまで私的な覚書である。

1. 「地域社会学会発足のころ」について

岩崎氏は、マクロな社会構造とミクロな生活という複眼的視点の「すりあわせ」が、発足時の学会のダイナミズムを生んでいたと述べられた。これはまさに、地域社会学会の基底をなす特徴であろう。

これを受けて筆者は、学会発足当時の会員が「マクロな社会構造変動とその変革主体としての生活の現場」という問題意識を多かれ少なかれ共有し、それを考える絶好のフィールドとして「地域」に向き合っていたのではないかと考えた。そしてそれは、しばしばマルクス主義の問題意識といわれるが、実はジンメル等も含め、社会学の基礎理論というか、地域問題に限定しない開かれたグランドセオリーがまずあって、その大きなスケールの問題意識への一つの方法・切り口として地域社会学の創設に挑んでいたという印象をもった。

もちろん現在も、たとえば徳田剛会員のように、ジンメルの理論研究と地域研究を噛み合わせている会員はいる。しかし、どちらかというとも最初から地域や地域社会に関心を持ち、適切な表現ではないかも知れないが、連字符社会学の一つとして地域社会学に取り組む研究者も少なくないような気がする。これは、いわゆる「大きな物語の終焉」の影響なのかも知れず、あるいは、実際には現在の会員も背後に大きな問題意識や理論的関心をもっている

が、そういう青臭いことを共有しづらくなっているだけなのかもしれない。

この点について、岩崎氏の所見をお聞きした。

これに対し、岩崎氏はまず、学会発足当時の会員の理論的関心においては、やはりマルクスの影響力が圧倒的に強く、ジンメルを初めとする社会学諸理論への理解・関心は希薄であったと述べ、諸個人のミクロな生活への着眼でさえもマルクスあってこそのものだったと回顧された。またマクロとミクロの視点のダイナミズムは、2017年の清水亮会員の指摘に見られるように、現在の地域社会学にも明確に受け継がれていると述べられた。そして地域社会学が、このダイナミズムを欠落させた「連字符社会学」の一つであってはならず、それこそが地域社会学の「生命線」であるとも指摘された。

筆者は、岩崎氏の見解に大枠で賛同する。ただし、ミクロな生活についてのマルクスの知見をめぐっては、やはり異論がある。今後ともぜひ、マルクス研究の大先達として、胸を貸していただきたいと念じている。

2. 「町内会研究を通してみるアソシエーションとコミュニティ」について

岩崎氏は、コミュニティ概念が、地域から切り離された形で注目を集めていると指摘された。確かに、コモンをめぐる議論も含め、必ずしも地域的領域や地方性に囚われない重要な関係として論じられることが多い。

そしてこうした発想の一つの源流が、岩崎氏の町内会に対する「住縁アソシエーション」概念にあったことを示された。これは筆者にとって、「目から鱗」であった。恥ずかしながら筆者は、これまで町内会研究をそのような視点から考えたことがなかった。現代に至る日本のコミュニティ、およびコモン研究の学説史を再考する上で、示唆に富むご教示をいただいた。

これをふまえ筆者は、コミュニティが地域から切り離されて論じることの重要性が明らかになったとき、果たして地域社会学は存続し得るのかと質問した。

岩崎氏は、地域社会学が、理論的・概念的に地域とア priori に一体化されないコミュニティ概念をふまえた上でなお、ローカリティやコミュニティについて深い研究を着実に蓄積してきており、筆者の不安が杞憂であると述べられた。またとりわけ近年では、福祉や移民に関する地域社会学研究において、「連字符—地域社会学」ともいうべき多様な、しかも行政による一方的規定性の解明にとどまらず、具体的な政策提言にまで結び付くような研究がなされつつあると指摘された。いわば地域社会学が一つの「連字符社会学」に分解されたのではなく、逆に地域社会学が多様な「連字符社会学」を包摂・統合する形で発展しているというのである。

こうしたお答えは、これまで分厚い実証研究を積み重ね、また学会の研究発展の動向を幅広い視野で見続けてこられた岩崎氏の経験と実感に根差すものであろう。また同時に、次項で述べる岩崎氏の独特のリージョン概念の理論的基盤とも密接に関連している。

3. 「概念整理」について

岩崎氏は、リージョンとコミュニティ、そして双方をつなぐローカル（ローカリティ）という雄大な概念整理をされた。その中で筆者が特に驚いたのは、リージョン概念が、ジェンダー・エスニシティ・雇用形態の違いまで含むということである。確かにリージョンを圏域性・境界性である以上、ジェンダー・エスニシティ・雇用形態の違いもリージョンだ。それらをいずれもリージョンと捉えることで、初めて見えてくる世界があると筆者は直感した。しかし、岩崎氏のリージョン概念はあまりに大きすぎて、筆者はどのように受け止めていいのか、やや呆然とした。そこで、その意義や有効性について追加説明・示唆をお願いした。

岩崎氏は、地域社会学会で、ジェンダー・エスニシティ・雇用形態の違い等に関する研究・報告が実際になされ、それらを包摂する形で地域社会学が発展してきたと述べられた。

言われてみれば、まさにその通りである。筆者はこれまで地域社会学会で、エスニシティに関わるいくつかの発表をさせていただいた。いわゆるエスニシティや移民を専門とする学会以上に、地域社会学会で発表して貴重な示唆をいただいた経験の方が圧倒的に多い。それはおそらく、エスニシティや移民を他の社会諸現象から切り離し、独自の対象として論じるのではなく、リージョン（圏域性・境界性）として、しかもマクロな社会変動とミクロな生活のダイナミクスという地域社会学の強力な磁場の中で考察することに、無意識のうちに大きな心地よさを感じていたのだと悟った。また筆者自身は、地域を越えて移動する、したがって圏域・境界を越えて移動する移民諸個人の生活圏こそがコミュニティだと考えていたのだが、それだけでなく移民であること自体が、ジェンダーや雇用形態の違いと同様、リージョンを越えたのではなく、既に一つのリージョンなのだという新たな視角を与えていただいた。筆者はすでに一度、定年退職を経た研究者だが、まさに「学海無涯」である。

さらに岩崎氏は、こうしたリージョンも含め、すべてゾチアールな世界であり、その背後に資本や国家といったゲゼルシャフトリッヒなものがあると述べた。筆者はむしろ、ゾチアールなもの内部矛盾こそが国家・資本を作り出していると考えている。そうでなければ、なぜ国家や資本が生まれたのか説明できないからだ。

この点について質問したところ、岩崎氏は、発生論的にはその通りだが、しかし現時点においてすでに国家・資本は、生活と対立し、生活を支配する機構として厳存しており、それとの対抗関係の中でゾチアールの実態を把握し、ゲゼルシャフトリッヒな構造の変動の筋道を明確にすることこそ重要な課題ではないかと答えられた。

この論点は、実は岩崎氏の著書『21世紀の『資本論』；マルクスは甦る』、および、それに対する筆者の書評以来の論争点の一つである。この点についてもまた引き続き、ぜひ胸を貸していただきたいものである。

4. 「阪神大震災のなかでの格闘／人々の自治と行政による包摂／調査実証における主観性、客観性、中立性」について

岩崎氏はいうまでもなく、地域社会学に震災研究という一つの大きな領域を立ち上げた

先駆者である。またそこで提起された社会学の「素人性」による無力さと、逆にそれゆえの強みも、現在も地域社会学で議論され続けている重要な論点だ。さらに岩崎氏は、こうした社会学の「素人性」のもつ強みを、社会学の実証調査における主観性・客観性・中立性とも関連させて報告された。

そして岩崎氏は現在、西村雄郎会員らとともに、地域住民と研究者のこうした広義の主体性を、地域アイデア・「よく生きる」こととその共振として掘り下げようとしている。筆者は個人的にはこれは、布施鉄治の「生活の発展的再生産」の視点と通じるものと捉えている。またこのような視点は、地域社会学会に多かれ少なかれ地下水脈的に共有されてきたようにも思われる。これを現時点で改めてアイデアとして自覚的に論じることは、大きな意義がある。

この点について、追加説明をお願いしたところ、岩崎氏はジンメル「心的相互作用の形式」という言葉を引きつつ、しかし相互作用するのは時々に変化する「心」ではなく、その根底にある「魂（プシュケー）」ではないかと答えられた。これを補足する形で西村雄郎会員は、地域生活文化圏という概念で各地域を捉えたとき、極めて大きな地域間の相違があり、そこには単なる客観構造ではなく、そこを生きる人々のアイデアの違いが見て取れる旨を述べた。

昨今、マルクス・ガブリエル等の新実在論、および、社会構築主義を克服する新唯物論等の論調をあげるまでもなく、心やアイデア、魂が実在するのは自明である。魂やアイデアという概念に違和感・危うさを感じる研究者が、しばしば主体性や連帯や共生といった概念の使用には驚くほど鈍感であるのは矛盾している。問題は、方法的社会主義と方法的個人主義、構造と主体が生活の現場でいかにせめぎ合っているかであり、しかもそれを単に傍観者的に「せめぎ合い」といって分かったかのように終わらせるのではなく、両者の分裂の克服の実態を当事者の実践として最後まで捉え切ることであろう。「人間の思考が対象的真理を手に入れる力をもっているかどうか」という問題は、観念的な問題ではなくて、実践的な問題（マルクス「フォイエルバッハ・テーゼ」）である。こうした実践を把握する大前提として、当事者の「よく生きる」ことの洞察は重要だ。

そして筆者は、その「よく（生きる）」の方向性は、研究者が想定・期待するそれであってはならないと考えている。それは、あくまで当事者による「生活の発展的再生産」である。それがいかに研究者の主観的な期待や願いと反する方向性であっても、それを客観的事実として謙虚に受け止め、その意味を解釈し、自らのそれ以前の想定や常識—それはしばしば社会やアカデミズムの想定や常識でもある—を覆し続ける無限の営みが、研究であろう。

したがって筆者は、研究者と生活当事者（調査対象者）の関係の議論にアイデアの共振を持ち込むのは、危険だと考えている。これは本学会シンポジウムで以前、似田貝香門氏とも議論させていただいた論点である。研究者は当事者がいなければ研究者になれないが、当事者は研究者などいなくても当事者である。どちらが主体的で、どちらが依存的かは明白だ。研究者とは、ただひたすら当事者のアイデアを、そしてそれ以上に当事者の実践を読み取り、解

積し、学ぶ立場であろう。研究者が実践に参加するとき、それはすでに研究者ではない。筆者を含め、多様な実践に関与する研究者は、その矛盾・対立に耐え続けねばならない。安易に「研究と実践の統一」などと考えると双方ともに「甘く」なり、双方の視野を狭めることになる。研究者とは所詮、人間そのものではなく、疎外された近代的分業の一つでしかない。だからこそ、研究者には単なるアソシエーションとしての学会ではなく、研究者に固有のコミュニティとしての学会が必要なのではなかろうか。

こうした筆者の見解に対し、岩崎氏は明確に反対の意を表された。「人は生きるために認識する」(ジンメル) という現実をベースにして初めて、「認識するために認識する」研究者も成り立つ。その意味で研究者も生活者であり、両者を切り離すことはできない。そしてその連続性が特に強いのが社会学の特徴だと述べられた。さらに筆者のように研究者を「疎外された近代的分業の一つ」と断じるのは、ある意味で研究者と生活者を分断し、結果として研究者の独善的自由を招き寄せることになりかねないと警鐘を鳴らされた。

5. 「自然の搾取」と「政策への連鎖」について

鯉坂学会員からは、地域社会学における自然・大地・土地の位置づけについて質問があった。

これに対し、岩崎氏は、マルクスの『資本論』において自然の搾取の観点が欠落していたことを一つの問題・限界として指摘された。地域社会学において自然・大地・土地の問題をより深く論じるためには、『資本論』の根底的批判のレベルから始めなければならないという一つの問題提起である。併せて、近年評判の斉藤幸平氏の議論についても、それが資本による自然の搾取を正面から認めている点を評価しつつ、しかしそれをあたかもマルクスの『資本論』の論理であるかのように論じている点を鋭く批判した。

筆者はこの問題についても、岩崎氏とも斉藤幸平氏とも異なる見解をもっている。マルクスは自然の搾取という観点をもっておらず、それゆえにこそマルクスは正しいというのが筆者の理論的立場である。これもまた、岩崎氏の著書『21世紀の『資本論』; マルクスは甦る』とそれに対する筆者の書評以来の論争点の一つだ。

地域社会学会がマルクス主義の大きな影響の下に生み出されたことをふまえれば、岩崎氏はまさにその理論的基礎の重要な意義を誰よりも熟知し、しかも同時にそれに対して誰よりも先端的でラディカルな批判者でもある。筆者も及ばずながら、これからも岩崎氏に「蠅螂の斧」の挑戦を続けたい。

もう一つ、谷口浩司会員から、マンション学会との関係で、地域社会学会ももう少し行政・政策と切り結ぶ研究を取り組む必要があるのではないかとの見解が示された。

岩崎氏は前述の如く、社会学にそうした「弱み」があることを認めつつ、しかしそれが逆に「強み」でもあり、しかもなお近年の地域社会学が「連字符ー地域社会学」へと発展する中で、多様な領域で政策形成に架橋する研究成果が生み出されつつあると指摘した。

行政化・政策形成の意義を十分にふまえつつ、しかしそれを決して「終着点」「解決策」

とはみなさない地域社会学の形成は、未だ途上といえよう。